

# ヘミングウェイの“殺し屋”の 諸評論の考察

得 良 匡

## 〔序〕

短篇小説は現代では長編小説に劣らぬ重要な確固たる地位を占める様になった。チェホフから流れた性格を問題にするのと、オー・ヘンリーから流れたプロット（筋）を問題にするのと、その系統は主として二派に分類される。様々な技巧を要し完成するのに困難な短編小説に於て、ヘミングウェイもその名手の一人である。短編小説作成に要する諸技巧に関して、これからヘミングウェイの“殺し屋”を取り上げてみる。これらの技巧を理解する場合、参考として批評家の見解も重要であるので、それらを見て行くことにする。

ここに“殺し屋”に関する評論が五つある。それらを出版手代順に並べてみる。

第一番目のは、C. Brooks と R. P. Warren 両氏の評論である。

第二番目のは、R. P. Weeks 氏の評論で、

第三番目のは、E. W. Morris 氏の評論で、

第四番目のは、L. H. Moore Jr. 氏の評論で、

第五番目のは、A. L. Walz 氏の評論である。

これからこれらの評論をみて、“殺し屋”で技巧的に問題となる所を考えてみる。

## 〔I〕

(C. Brooks と R. P. Warren 両氏の評論)

この小説の技巧についてあるかなり明白な事が考察され得る。この小説は一つの長い場面と三つの短い場面から構成されている。事実、その手法は全く完全に情景的であるので、推移を造る為には、三つ又は四つ以上の文章は要しない。話の焦点は全体を通じて客観的であり、実際にすべての情報は単純な現実的な会話で伝えられる。第一の場面に於て、ギャング達の使命の明示は二、三の細部を通して完成される。その細部はギャング達が（指紋を残すのを避ける為に）手袋をはめて食事をすると云う事実、彼らは棒の後の鏡に眼をとめていると云う事実、ニックと料理人とが縛られた後にサービス窓の所で散弾銃を持っていたギャングは、彼の友とジョージを集団の写真の為に調整している写真家の様にフロントの外に置いたと云う事実、これらすべての事実は彼らの使命の特定の性質の前に明白にされる。

この小説の技巧に関して他の所見がなされ得る。作文の賢明さと事情などの未決定状態が第一の場面に於て、ギャング達のからかいによって維持され、それから第二の場面に於て他の水準に移しかえられるその微妙さである。しかしその様な所見は述べる価値はあるが、読者に対して普通それ自身を提示し又はそれ自身を提示する様に許されるべき第一の質問に答えていない。

その第一の質問はこの小説は何についてのものであるかと云うことである。この質問に対して早めの答えを与えることの重要性は、ある種の読者がこの小説を始めて知った時に、この小説は第一の場面に於いて語り尽されていると考え勝ちになると云う事実によって示されるが、事実は第一の場面はそれ自身焦点にならないし要点を持たない。他の種類の読者は、第一の場面はその解決の欠如を持ち、実際は第二の場面を満たす為に使われていることを理解する。彼は彼の要点を、ギャング達から脱れない様にする、その辺を進行しているすべての事を止めない様にするオール・アンド・レソンの決心にみる。この読者はこの小説はここで終るべきだと感じる。彼はこの小説の最後の数ページに於いては関連性を見出さない。そしてなぜ著者が彼の効果をなくしたのかと思う。最初の読者は、我々は云うかも知れないが、“殺し屋”はギャングの物語、現われてこない行動の物語で

あると思う。第二のもっと理解できる読者は、恐らくアンドレソンの物語は非常に間接的に接近させられてきて、そして非常に不適切に消えてなくなる様にされていると云うあの驚異の念を持つであろうが、それをアンドレソンの物語と解釈する。他の言葉で云うなら、読者は、この小説は何であるかと云う質問をそれは誰の物語であるかと云う質問に置き換え勝ちである。それは誰の物語か。彼がその質問を述べる時、彼はヘミングウェイがこの小説をギャング達に焦点を置いたのではなく、又アンドレソンにでもなく食堂の少年達に置いてあったのであると云う事実と直面する。この小説の最後の文章を考えてみよ。

“私はこの町を出て行くつもりだ。”とニックは云った。

“そうか”とジョージは云った。“それはしていいことだ。”

“部屋で待ちながら、彼がそれを受けようとしているのを知っている彼のことを、私は考えることにたえられない。それは非常に恐ろしいことだ。”

“なる程”とジョージが云った。“君はそれについて考えない方がよい。”

それで二人の少年の内で印象が与えられてきたのは明白にニックである。ジョージはなんとかしてその状況と取り組んできた。推論のこの線に沿って行けば、それはニックの物語となる。そしてその物語は悪の発見についてである。その主題はある意味ではハムレット劇の主題である。この小説の主題の定義は、それが受け入れられる様にみえる場合でさえも、もちろん細部の構造に対してその関係を検討されなければならない。小説を評価する場合、それを理解する場合と同様、その主題が同化されてきた技巧は考慮されなければならない。たとえば具体的な質問をすれば、この小説の最後の文章は、読者に対してある細部が始めて現われた時に、単に偶然で現実的な事項である様に思われていたものを説明するか？もし我々がその主題を少年の悪の発見であると考えれば、数種のその様な細部はそれらの完成と意義を見出す。

ニックはギャング達に縛られ、さるぐつわをはめられ、ジョージによっ

て解放された。引用すると、——ニックは立ち上った。彼は以前彼の口にタオルをはめられたことはなかった。“ねえ”と彼は云った。“大変だった？”彼は威張って歩こうとしていた。

さるぐつわをかまされることは、あなたがスリラー物で読んだものだ。そしてあなたに起ったものではなかった。最初の効果は殆んど楽しい興奮のそれであり、確かに男らしい姿勢の為の口実である。ついでながら、ヘミングウェイは特定の言葉、タオル、を使用し、一般的な言葉、さるぐつわ、を使用していないと云うことは注目に値する。タオルと云う言葉は繊維のあらさと口の膜に不愉快な乾いた効果を暗示するからそれはさるぐつわと云う言葉に対して、ある感覚的な利点を持っているのは正しい。しかし直性に於けるこの利点は恐らく他のものによってその重要性を奪われる。タオルはさるぐつわと同様スリラーもので是認され、そしてここではスリラーもののそのきまり文句が真になる。

全事件が与えられる方法—彼は決して以前に口にタオルをはめられたことがなかった—これは最後の発見に対して一つの指示物として一見して現実的な細部を満たすことになる。もう一つの指示物は、映画についてのギャングの冗談の中に現われる。——“君はもっと映画に行くべきだ。映画は君の様な頭のいい少年にはすばらしい。”ある意味では、もちろん、映画についてくり返えされた評言は、ギャング達が食堂で彼らの取決めをした後すぐ述べられるものだが、一種の間接的な説明として役立つ。読者はギャングの殺人に対する標準的な理由と処置とを知る。しかし他の水準に於て、これらの所見は恐怖の非現実的なきまり文句が真実性を持つと云う発見を強調する。ギャングが話しかける少年は映画への言及を理解し、又彼はすぐに質問する。“何の為にあなたはオール・アンドレソンを殺そうとしているのか？彼はあなたに一体何をしたのか？”“彼には俺達に何かをする機会の一つもなかった。彼は俺達に今までに会ったこともなかった。”とギャングは答える。そのギャングは彼が生きている規約を受け入れ、それに少し誇りを感じてさえている。その規約は小さな町の世界を超越するものである。あたかも彼はある掟によって生きている様なものでありそれは彼を個人的な好みや、個人的な悪意の問題から超越させるものであ

る。この非現実的な掟、それは普通の個人的な生活の要素を拒否するから非現実的であるが、それはだじゃれ、さるぐつわと同様、突然現実的なものとして発見される。この非現実的な劇的な性質は、彼らが食堂を去った後、アークライトの下に出て街路を横切る時、“ぴったりした外套をつけ、ダービーハットをかぶり、彼らは一団の寄席芸人の様にみえた”ギャング達の描写に反映されている。それは彼らの会話に充満さえしている。会話そのものが、機械的になっただじゃれや冗談、常にその状況に優先し、その状況を乗り越える一種の硬直した陳腐な冗談、これらのべらべらの性質を持つ。この水準に於いて、一団の寄席芸人へのたとえは、もっと間接的に劇的に描写されてきた一種の明白な細部の要約である。もう一つの水準では、彼らの知力の退屈させる技巧的な性質がぞっとさせる様な暗示を持つ。それは彼らが、少年にとっては衝撃を与える様な状況を受け入れる職業的なのんきさに対する指標である。彼らは軽蔑的であり、退屈さえするうぶなしろろとの観察者達に直面させられる時、新入りの者への軽蔑と退屈さである。この掟はスリラーものや映画の技巧的な世界から現実へと突然移されたものだが、十分衝撃的なものであるが、オール・アンドレソン、追われている男も又その掟を受け入れると云う事実が、ニックにとっては更に衝撃的でさえある。ニックが持たらずニュースに直面させられると、彼は少年なら正常だと思ったであろうすべての反応を拒否する。彼は警察を呼ばない。彼はそのことを単なる虚勢だとみなさない。彼は町を去らない。“あなたはそれを何とか決められないのか？”と少年はきく。“いや、私はまちがったのだ。”もっと以前に我々がみた様に、ある種の読者にとっては、これはこの小説の重要な点であり、そしてこの小説はここで終るべきだ。その様な読者に、著者は話を正しく進めていると納得させることができるならば、彼の質問、後に続くかなり退屈な、一見して不適切な小さな出来事、ベル夫人との会話、その意義は何であるかと云う質問に答えなければならない。ベル夫人はわずかばかりの引き伸ばされた解説を与えることに役立ち、彼女にとっては“非常にいい人”であり、全くボクサーについて彼女が考えている様ではないアンドレソンに対する同情を得ることで、この小説に力をつけることにさえ役立っていると時々云われている。

しかしこれは鋭い読者を満足させるのに十分ではない。そして彼はこれに満足することを拒否するなら正しい。ベル夫人は本当にマクベスに於ける地獄の門の番人である。彼女は正常の世界であり、それはその通常の過程に於いて流れ続けていると云う正にその事実から今や衝撃的なものである。彼女にとってオール・アンドレソンは、彼はリングにいたと云う事実にもかかわらず、ただいい人である。彼は大変天気の良い日には出かけて散歩すべきである。彼女は機械的な掟の要求に対照となる彼の通常の個性を指示する。映画のスリラーものの非現実的な恐怖が真になったとしても、追われている男が出かける様に決心しようとして二階でベッドに横たわっているとしても、ベル夫人は依然としてベル夫人である。彼女はハーシュ夫人ではない。ハーシュ夫人はその場所を所有し、彼女はハーシュ夫人の為にその面倒をみているのである。彼女はベル夫人である。下宿のドアの所で、ニックは正常が示す皮肉的な対照に気付かない正常であるベル夫人と会った。食堂に帰って、ニックは正常の場面に戻るが、正常の場面は恐怖の衝突を知っている。それは同一の変りない食堂であり、ジョージと料理人は彼らの仕事をしている。しかし彼らはベル夫人とは別で、起ったことを知っている。しかし彼らでさえも、彼らの通常の課程から決してそらされることはない。ジョージと料理人はその状況に二つの異った水準を表わしている。料理人は最初からそれに加わることを望んでいなかった。彼はニックが帰った時、ニックの声を聞いた時、彼は“私はそれを聞くことさえしない”と云う。そして彼はドアを閉す。しかしジョージは始めからニックはアンドレソンに会いに行くべきであることを提案していた。しかしながら、君が行きたくなければ行くなと云う。ニックが彼の話をした後でジョージは“それは大変なことだ。”と批評することができる。しかしジョージも又少くともある意味ではその掟を受け入れた。ニックが彼は何をしたのかと云う時、ジョージは殺し屋達自身ののんきさをひびかせながら答える。“誰かに負けると約束して勝ったのだ。それが彼らが彼を殺す理由だ。”他の言葉で云えば、その状況は料理人にとっては、それが彼自身の安全性を巻き込むことに関する限りに於いてのみ、衝撃的である。ジョージは他の暗示に気付いているが、それらを追い払うことができる。それ

らのどちらにとっても、その状況は悪の発見を意味しない。しかしニックにはそれは発見である。なぜなら、ジョージは“君はそれについて考えない方がよい”と云う。ジョージの大人の忠告を聞くことをまだ知らない。この点に対して、“殺し屋”の考察は、事件の間の関連と登場人物の態度に関してこの小説の構造に関係してきた。

## 〔Ⅱ〕

### (R. P. Weeks 氏の評論)

殺し屋達がヘンリーの食堂で、オール・アンドレソンを待っているとニックに警告した後、ニックはベル夫人にアンドレソンの下宿で会う。そして間違っただけでハーシュ夫人として彼女に話しかける。エドワード・サムソンはこの混乱は単にこの小説の中にある多くのものの一つであり、それらすべてがその主題“……個性は失なわれた。人々は彼らの地位を他人の仲介人として受け入れた。多くのことはそれらがみえる様なものではない。”を指示する。これは訳が分る。しかしそれはこの小説に対するベル夫人の主な貢献を説明しない。ベル夫人はオール・アンドレソンについて多くのことを云う。そしてそのどれもがサムソンの用語を使うと、調査されていない。“彼は彼の部屋に一日中いた。彼は気分がよくないと思う。……彼は非常にいい人である。彼はリングにいた。御存知の様に、彼の顔の状態以外からはそれを知ることはできないだろう。彼もただ同様におとなしいのだ。”彼女の所見のすべてを考えて、ブルック、ウォレン両氏は次の様に述べている。“ベル夫人は本当にマクベスの地獄の門の番人である。彼女は正常の世界であり、それはその通常の過程を流れ続けていると云う正にその事実から、今や衝撃的である。”その番人は、ド・クインシーが云った様に、他の世界、通常の世界に存在する。そして門をたたく音がきかれる時に、“人間は鬼畜の様なものの上にその逆流を作った。そして我々が住んでいる世界の所業の再設立は最初にそれらを支えていた恐ろしい間劇を深く感じさせる。”マクベスとマクベス夫人は、ド・クインシーが主張する様に、“人間人事の通常の流れと連続から計り知れない溝によって切り離されるかも知れない。”しかし殺し屋達はそうではない。

彼らはベル夫人がそうでない様に、間劇に閉じ込められない。なぜなら、ヘミングウェイは事件の通常の流れに於ける不連続として悪をみていないからだ。

“殺し屋”に於けるベル夫人の主な機能はオール・アンドレソンの孤立を強めることである。彼の絶望的な状況について彼女が知らないと云うことは、正常でも異常でもない。それは単にヘミングウェイの物の見方に於いては避けられないことである。サンチャゴのマグロはサメであると思ひそれによって彼の試練への彼らの完全なる誤解を示す“老人と海”の終りの旅行者達と同様の働きをする。フレデリック・ヘンリーが、“武器よさらば”の終りでキャサリンが死につつある時に、昼食と夕食をとるレストランの平気な給仕人達と同様の働きをする。……

ヘミングウェイはブルックス、ウォレン両氏が正常の世界と称しているものにぐいと引き戻す為には、ベル夫人の様な気付かない登場人物達を使用しない。ベル夫人の機能はその様に新入者に対する引立て役（禁欲的な孤立に於て耐えなければならぬのは正常の世界ではなく、激しい意味のない世界にすぎないと云うことを知っている選ばれた団体）になる。

### 〔Ⅲ〕

#### (E. W. Morris 氏の評論)

ブルックス、ウォレン両氏の“小説の理解”で注意を促された様に、マクベスに於いてシェイクスピアが酔っぱらった番人を採用したのと大いに同じ目的の為になされた、“殺し屋”に於けるベル夫人のヘミングウェイの使用は、この難解な文章の通常の説明となった。

ベル夫人は（その名前の付加的性質に注目せよ。と云うのはベル夫人は現代のベルの応答者であるからだ。）正常の世界であり、冷血な殺害者の映画的な恐怖に気付かずに、はなれて存在し続けていた。マクベスの番人と同様、ベル夫人は彼女が示す事実、又すべての細部で行動の緊張を解きほぐし、対照によって犯罪の特異な恐怖を強める。ニックが知ることは犯罪は遠く離れた首都ばかりでなく、理解できる人々だけが住むサミットにもあるのだと云うことである。

しかし“殺し屋”には他の十分説明されていない明白な不適切なことがある。混乱させることには、殺し屋達が最初、オール・アンドレソンを殺す計画をたてる食堂の時計は二十分早い。時計に対する唯一の短い言及はアル、マックス、料理人、ジョージそしてニックがその時計によれば、五時二十分から七時十分まで一時間五十分の間、小さな食堂で緊張して待ち、彼らの滞在は、アンドレソンの来ることとその時間に依存していると云う事実にもかかわらず、その言及は登場人物達によってなされる。その部屋の誰れも時計を調べないで、すべての時間は進んだ時計で計られる。その正しくない時間は、この小説の重要な部分ではない。殺し屋達は記憶に間違いをせず、彼らは早く去らないし、オールを取り逃さない。しかし六つの別々の場合に、読者は登場人物達の一人が時計をみたことを告げられる。ジョージとマックスはしばしばその時計を眺めていることが示される。なぜヘミングウェイはこの小説に進んだ時計を入れたのか？確かに、それは間違いではない。確かに、それは目的のないものではない。不正確な時間の断片に対する二つの理由がある。第一に進んだ時計は現実的な細部であり、簡易食堂のメニューや登場人物達の日々の話しがそうであると同様である。それが現実的な細部を強調している様に、ベル夫人は最も異常な事件さえもとり囲み続ける正常の世界を強調している。それから登場人物達も読者も共に食堂は通常の欠点のある設備の食堂にすぎないことを常に知っている。

しかし不正確な時計はこの小説では、第二の目的がある。その時間は真の時間ではない。登場人物達ばかりでなく、読者も頭を働かせる努力をして真の時間に対して訂正をしなければならない時間である。三百語、三百の劇的な言葉の中で五回、ヘミングウェイは読者に時計をみ、その面を想像し、その針を再調整することを強いる。この工夫で、著者は不安に合う様に読み方をおそくし、その結果読者をオールを待っている一団の一部にする。進んだ時計は製作技術が困惑させるものになるかも知れない策略の異常な一片である。しかしとにかく第一の殺し屋とは違って読者は“おお、時計なんかはくたばってしまえ。”と云うことはできない。

## 〔Ⅳ〕

## (L. H. Moore Jr. 氏の評論)

アーネスト・ヘミングウェイの“殺し屋”に於ける最も当惑させ最も討論された文章の一つは、この小説の終り近くで、ニックがオール・アンドレソンの部屋を去る時、彼が間違えてハーシュ夫人と呼んだベル夫人に会う時に起る。ベル夫人は彼を正す。“私はハーシュ夫人ではない。”“彼女はその場所を所有している。私はただ彼女の為にその面倒をみているのだ。私はベル夫人だ。”ブルックス、ウォレン両氏によって提起された説明は最も重要で最もよく知られている。“ベル夫人は本当にマクベスの地獄の門の番人である。彼女は正常の世界であり、それはそれがその正常の過程を流れ続けていると云う正にその事実から衝撃を与えるものである。”<sup>(1)</sup>これはこの限りでは確信させるものである。しかし何らかのとりとめのない会話、たとえば天気に関して又はその様な問題に対する何か他のその様な現実的な一筆は同様の目的に奉仕するだろうか？ここでの真の問題には答えられないままになっている問題だが、なぜヘミングウェイがベル夫人に彼女は本当の持主であるハーシュ夫人の為にその下宿屋の面倒をみているのだと説明させるのかである。なぜこの情報は不適切ではないのか？

エドワード・サムソン氏はこの問題と直接に取り組んでいる唯一の批評家であるが、この会話は“個性が失なわれた人々は、彼らの地位を他人の仲介人として受け入れた。物事はそれらがみえる様なものではない”<sup>(2)</sup>と云う主題を強化することに役立っていると提案している。しかしこの混乱又は外見対現実の主題、暴力の世界対正常の世界の主題と同様、非常に一般的な方法でのみこれを説明する。同様の批評が、ヘミングウェイはオール・アンドレソンに関する付加的な情報を単に与える為に全ての挿話を含めた、と信じている人々についてなされることができる。ロバート・ウィークス氏は“ベル夫人の機能はアンドレソンの孤独を強めることである”<sup>(3)</sup>と述べ、そしてオリバー・エバンズ氏は“ベル夫人はこの恐れた追われた男に対する読者の同情を増す為に持込まれた”<sup>(4)</sup>と信じている。しかしながら批評家は誰もハーシュ夫人に対するベル夫人の関係の彼女の説明の目的

を説明しない。そしてこの議論の多い文章の解釈のどれもこの一つの見たと所、つまらない現実的な一筆の含蓄を十分捉えていない。

彼女はハーシュ夫人の為にその家を経営している、とニックに対してベル夫人に説明させるヘミングウェイの意図に対する手がかりは、ハーシュ夫人はこの場面の他の数種の場面に対する類似性によって与えられている。それは一人の人物が他の人物の為に何かをする、その物語の数種の状況の最後のものである。それはヘンリーの食堂であるが、ジョージがそれを経営している。ヘミングウェイはそれをジョージの食堂と単に呼んではいなかったのだから、彼は明らかにこの主題をこの物語の始めに設定し強調することを意図した。殺し屋達が去った後、ニックはオールに警告し続ける。そしてオールは二度ニックに感謝し、彼が彼の為にしたことに対して深く感謝している様に見える。ニックはこのスウェーデン人の為に尽したばかりではなく、彼はある意味ではそれをジョージの為にしたのだ。“ジョージは私が来てあなたにそれについて話す方がよいと思った。”と彼は云う。

登場人物が他の登場人物の為に何かをするその様な挿話の最も劇的で重要なことは、他のその様な挿話を強めることである。そしてそれらは順番にそれを強調する。殺し屋達は、それは判明するが、ジョージやニックやベル夫人と同様、単に友人の為に尽しているのである。そして彼らの仕事は全く彼らに珍らしいものではない。ニックは彼らにオールは殺されるに値するどんなことをしたのかときく。マックスは答える。“彼は私達に対して何かをする機会を持たなかった。彼は私達をみたことがなかった。”それではなぜ彼を殺すのかとジョージはたづねる。“私達は友人の為に彼を殺そうとしている。ただ友人に恩義を施す為にだ。頭のよい子だ。”それからある人が他の人の為に仕事をすると云う他の状況、最も長いものは当惑させるベル夫人の文章であるが、その目的は主として人間の生命を奪うと云うことに対する殺し屋達の無頓着と彼らの恐ろしい無関心さの恐怖を強調することである。殺し屋達はジョージがヘンリーの食堂を経営する様に、ニックがオール・アンドレソンに警告する様に、ベル夫人がハーシュ夫人の下宿を経営する様に、きまぐれできまりきった様に殺す。この解釈はヘミングウェイをブルックスとウォレンでさえも彼をそうであると思

っているよりも、“殺し屋”に於て更に技巧的で微妙な芸術家として示している。この短編で彼は最も理白な現実的な色々な筆致で描いた。本当らしさを加える他に、全体としてそれらが主題的な効果と重要性を持つ様にお互を結びつける。

(注)

- (1) Cleanth Btooks, Jr, and Robert Pen Warren, *Unherstanding Fiction* (New York, 1959) 2nd edition, p.306.
- (2) Edward C. Sampson, “Hemingway’s ‘The Killers,’” *Explicator*, XI (October, 1952), item 2.
- (3) Robert P. Weeks, “Hemingway’s ‘The Killers,’” *Explicator*, XV (May, 1957), item 53.
- (4) Oliver Evans, “The Protagonist of Hemingway’s ‘The Killers,’” *Modern Language Notes*, LXXIII (December, 1958,) p. 589.

[V]

(A. L. Walz 氏の評論)

アーネスト・ヘミングウェイの“殺し屋”には、混乱した性といわれ得る主題がある。マックス、ギャングの一人、がジョージ、食堂の経営者、をニック・アダムズのボーイフレンドとして言及する。ニックと料理人であるサムは“修道院で一对のガールフレンドの様に”一緒に縛られる。マックスはジョージは“ある少女を立派な妻にする”だろうと云う。その主題は終りにアル、他の殺し屋、についての全知の語り手の描写一切り取られた散弾銃の銃身が彼の余りにもぴったりと合った外套の腰の下に少しふくらんでいた一になる。この映像はかなり不思議な妊娠の茶化しである様にみえる。

この最後の解釈は“殺し屋”の二年後に出版された“武器よさらば”に於ける著るしく似た有名な描写を思い出す時、よりこじつけでなくなる様にみえるだろう。通り過ぎる兵士達をみながら、ヘンリー中尉は彼らの肩マントの下でベルトの前に二つの皮の薬包箱、灰色の皮の箱がうすくて長い6.5mmの薬包のはさみの包みで重くなり、肩マントの下でふくらんで突出していた。それで人々は道路上を通り過ぎながら、彼らは妊娠6ヶ月になっているかの様にして行進していた。

私はこれら二つの映像が同様に主題的に働らくとは提示していない。

“武器よさらば”に於ける描写が私には“殺し屋”に於けるアルの妊娠の解釈を強化することの様にみえるとだけ提示している。

混乱した性の主題はこの小説の統合された部分であり、それはサムソン氏によって十分述べられている。サムソン氏によれば“殺し屋”のひどく機械化された非情の世界では、個性は失なわれ、人々は彼らの地位を他人の代理人として受け入れ、多くの物事がそれらがみえるものの様ではなく、そして殺人でさえも、他のあらゆる物と同様、機械化されたきまりきった効果を示すものになる。他の云い方をすれば、ベル夫人はハーシュ夫人であるべきであり、時計は正しくあるべきであり、食堂はジョージのものだと云われるべきであり、殺人ももしそれがいやしくもなされるべきであるなら、直接関係あるそれらの人々によって激怒と暴力に於てなされるべきである。

サムソン氏の言明に男達は男達であるべきであり、女達は女達であるべきであり、人は死ではなく、生で満たされていなければならないと云うことが付加されるかも知れない。

### 〔諸評論の考察〕

#### (i)

さてヘミングウェイの“殺し屋”に関する五つの評論をみてきた訳だがこれから、これらの評論の論点を考えてみよう。

第一の評論を簡潔に要約してみる。

ブルックス、ウォレン両氏はこの短編は一つの長い場面と三つの短い場面とから構成されていると指摘している。

第一の場面は、ヘンリーの食堂のドア (p. 224) から、私はそこへ行こう (p. 230) までである。

第二の場面は、戸外ではアークライトが樹のあらわな枝を通して輝いていた (p. 230) から、やってきたことに感謝する (p. 232) までである。

第三の場面は、ニックは出て行く (p. 232) から、おやすみとその女は云った (p. 232) までである。

第四の場面は、ニックは暗い街路を上って行った (p. 232) から、“なる程” とジョージは云った。君はそれについて考えない方がよい” (p. 233) までである。

これらの場面でのニックの行動を簡潔に述べると次の様になる。

第一の場面で、ニックはヘンリーの食堂から出て行く。

第二の場面で、彼はオール・アンドレソンに会う。

第三の場面で、彼はベル夫人からアンドレソンについてあることを告げられる。

第四の場面で、彼は食堂に帰る。

ブルックス、ウォリン両氏は云う。

ヘミングウェイはこの小説をギャングやアンドレソンにではなく、食堂の少年達に焦点をあてて置いたのである。この小説の最後の文章を考えてみよ。

“私はこの町から出て行くつもりだ。” とニックが云った。

“よろしい” とジョージは云った。“それはするのにいいことだ。”

“私は彼が部屋の中で待っていて、それを受けようとしているのを知っているのを考えることがまんならないのだ。それは非常に恐ろしいことだ。”

“なる程” とジョージは云った。“君はそれについて考えない方がよい。”

そこで二人の少年の内で印象が与えられてきたのは明らかにニックである。ジョージの方はなんとかしてその状況と取り組もうとしてきた。この様に推論して行くと、それはニックの物語である。そしてこの小説は悪の発見についてである。主題はある意味ではハムレット劇の主題である。

ニック・アダムズはあることで手ほどきを受ける。作者はニックを新入者として設定している。彼は“ギャングが彼が生きる条件、小さな町の世界を超越する条件を受け入れ、少し誇りを感じてさえいる” のを知っている。そして“彼はあたかも掟、個人的な好み又は個人的な敵意の問題から

彼を引き上げる掟によって生きている”ことを知る。彼は縛られ、さるぐつわをはめられると云う経験をする。そしてオール・アンドレソンの絶望的な状況を知り、次の様なことを悟る。——私は彼が部屋の中で待っていて、それを受けようとしているのを知っているのを考えることにがまんがならないのだ。

## (ii)

次にベル夫人のこの小説での機能について考えてみる。

四人の批評家が見解を述べているが、かなり興味をひくものである。以下列挙してみる。

第一番目に、ブルックス、ウォレン両氏の見解は次の様なものである。彼女は本当にマクベスの地獄の門の番人である。そして彼女は正常の世界であり、それはそれがその平常の過程を流れ続けていると云う正にその事実から今や衝撃を与えるものである。

第二番目に、ウィーク氏の見解は彼女の主な機能はオール・アンドレソンの孤独を強めると云う事である。

第三番目に、モリス氏の見解は次の様なものである。彼女は正常の世界であり、冷血な殺し屋の映画的な恐怖を知らずにそして離れて存在し続けてきたものであった。そして彼女は彼女が示すあらゆる事実の細部で行動の緊張をときほぐし、対照によって犯罪の特異な恐怖を強める。

第四番目に、ムーア氏の見解は他の人の代理人として彼女はハーシュ夫人の下宿屋を経営していると云う事である。

所で、関心が持たれるのはこれらの見解に対する考察である。

ウィーク氏は氏の見解によって次の様に解釈している。

ヘミングウェイはブルックス、ウォレン両氏が正常の世界と称しているものに引き戻す為に、ベル夫人の様な気付かない登場人物達を使用はできない。その様にベル夫人の機能は手ほどきを受けた者に対する箔、——正常の世界ではなくて、ただ禁欲的な孤独の中に耐えられなければならない暴力的で無意味な世界があると云うことを知っている選ばれた一団——として存在している。

ウィーク氏の解釈から次の様なことが考えられる。

小説の読み方、鑑賞の仕方、解釈の仕方と云うものがある。氏の解釈はベル夫人の機能を強調しながら、この小説の読み方の一方法を提示している。

それから小説を構成している材料は色々ある。ベル夫人が現われる場面はその材料の一つとみなされるかも知れない。そしてモリス氏の見解である“冷血な殺し屋の映画的な恐怖を……対照によって犯罪の特異な恐怖を強める”これはその場面が情景的であると感じ、材料の小説への組み込まれ方を感じ取っている。

ベル夫人の機能についての見解に対する考察を続けてみよう。

ムーア氏は次の様に主張している。

殺し屋達はジョージがヘンリーの食堂を経営する様に、ニックがオール・アンドレソンに警告する様に、ベル夫人がハーシュ夫人の下宿を経営する様に、気まぐれできまりきった様に殺す。この解釈はヘミングウェイをブルックスとウォレンでさえも彼をそうであると思っているよりも、“殺し屋”に於いて、更に技巧的で微妙な芸術家として示している。この小説で彼は最も明白な現実的な色々な筆致で描いた。本当らしさを加える他に、全体としてそれらが主題的な効果と重要性を持つ様にお互を結びつける。

ムーア氏は、ブルックス、ウォレン両氏は異常な状況の中でのベル夫人の正常な世界としてのアイロニカルな働きを指摘しているが、この見解より自己の見解を更に進んだもとだと主張している。それはベル夫人の小説中での意義を統合的に考え、殺し屋達の行為を納得できる様に説明する。そして、創作に含まれる他人の論理的な考察を超越した部分を考えると、多少論理的すぎるかも知れないが、“この小説で彼は最も明白な現実的な色々な筆致で描いた。本当らしさを加える他に、全体としてそれらが主題的な効果と重要性を持つ様にお互を結びつける。”と主張する。しかしベル夫人の機能についての氏の見解は納得させる力を持っている。自己の地位を他人の代理人として受け入れる見方から、理論的に小説全体を統合的に捉えた解釈を示している。氏の見解はこの小説を一つの視点からどの様

に理解するかを示している。

最後に二つの評論について考えてみる。

モリス氏は時計に言及しこの小説に於けるその意義を説明している。ウォルズ氏はヘミングウェイの“殺し屋”には混乱した性とも云われ得るものの主題があると主張し、ベル夫人はハーシュ夫人であるべきであると云うサムソン氏の見解に同意している。これは多くの異った解釈がなされ得ることを示している。

### Bibliography

- 1 Hemingway, E. *The First Forty-Nine Stories*. London : Jonathan Cape, 1975.
- 2 Brooks, C., and Warren, R. P. *Understanding Fiction* 2ded. revised. New Jersey : Prentice-hall, Inc., 1971. pp. 303-307
- 3 Weeks, Robert P. "H's 'The Killers,'" *Explicator* XV (May 1957), item 53.
- 4 Morris, William E. "H's 'The Killers'." *Explicator* XVIII (Oct. 1959), item 1.
- 5 Moore, L. Hugh, Jr. "Mrs. Hirsch and Mrs. Bell in H's 'The Killers.'" *Modern Fiction Studies*, XI (Winter 1965-1966), pp. 427-428.
- 6 Walz, Lawrence A. "H's 'The Killers.'" *Explicator* XXV (January 1967), item 38.